

今日は人の感情についてお話ししたい。

人間の持つ複雑な感情は、進化の途上で我々が身に着けた反射としての性質と、今生きている社会や文化双方に影響を受けている。

例えば、暗闇が怖いとか、人が好きになるとかいった感情は私たちが生き物として、自分の身を守るためにや子孫を残すために身に着けたものだろう。さらに、私は遠くに行ってみたい、知らない土地に行ってみたいという気持ちがあるが、これももしかすると、新しい遺伝子を得るために私たちに宿っている感情なのかもしれない。

最近聞いた講演で、人間の感情の歴史についての話があり、興味深かった。

17世紀末、スイスのバーゼルという大学街で 一人の勉強熱心な学生が 故郷から 100 キロ離れて暮らしていた。講義に姿を現さなくなり彼を心配した友人達が部屋を訪れたところ、彼は高熱でぐったりしていた。医者が呼ばれたが原因不明で、非常に重体に思われた。これは命の危険があると判断され、地元に戻すことになった。しかし、担架に載せるやいなや 学生の呼吸は少し楽になり そして故郷に着く頃には ほぼ完全に回復してしまった。

この病気のことを 1688 年にある医師が「ノスタルジア」と名付けた。これは歴とした病気として認知され、ヨーロッパ各地で死者が確認された。「ノスタルジア」つまりホームシックによる最後の死者は第 1 次世界大戦をフランスで戦ったアメリカ人だったとされている。

私たちはホームシックで死ぬことはない。車や鉄道などの交通機関が発達したし、今では SNS があり、故郷との心理的な距離は限りなく小さい。

人間は高度に文化的な、文学や芸術、思想や宗教的な信念、政治的経済的なイデオロギーにも感情を反応させている。

東日本大震災が起きた 2011 年、長期独裁政権が続いていた中東や北アフリカ地域の国々で一気に民主化が進んだ「アラブの春」と言われた時期があった。

この時、民主化を求めて戦うある若い女性が、「この花を摘むことはできても、春の訪れをとめることはできない」という言葉を残した。民主化のための戦う若者や自らを花にたとえて、この花を摘むことはできるだろう、しかし、春が訪れる自然の変化、つまり民主化は押しとどめることはできないと言っている。

このような、社会の変革を期待する喜びは、人間の持つ非常に高度な感情表現だ。しかも、驚くべきことにこの喜びをアラブの大勢の若者が共有し、自らの命をもかえりみないような行動へと駆り立てられていた。こんな感情は人間にしか持ちえない。

3月5日、東大の渡辺英徳教授が見えてN G Pの企画としてデジタルアーカイブでつなぐ戦争・原爆の記憶～長野から考える国際平和～という講演をしてくださった。渡辺教授が校長室にいらして東日本大震災アーカイブを見せてくださった。津波で亡くなった方たちが地図上に点で記されていて、結局は命を落としてしまうその人々が避難していく様子がマップ上で移動していくのを見て、本当に心がゆさぶられる思いがした。

私たちは何を知っても、何を見ても、心が動かなければ、行動できない。

私たちが東日本大震災で起きたことをより深く理解するためには、私たちの感情の力が必要だ。私たちに感情がなければ、原爆の悲惨さなど理解できるのだろうか。

私たちは友人の喜びを自分のことのように喜べるか。私たちは出会ったことの無い人の悲しみを悲しむことができるか。私たちは正しく怒り、それを適切に表現できるか。

君たちは、高校生活を送りながら様々な感情に出会い、それを育てている。豊かな感情を養いそれをコントロールできることは、知識や能力を身に着けるのと同様に大切なことだ。やがて新入生が来れば、長野高校に新しい仲間を迎えたことの喜びを共有するだろう。お互いの気持ちを想像しながら、心豊かな毎日を過ごしてほしい。